

菅江真澄の江戸期「胆沢郡徳岡田植踊」と 豊作祈願芸能

菊地 和博

菅江真澄が記録した江戸期伊達藩の「胆沢郡徳岡田植踊」（現岩手県奥州市胆沢区）の内容には、東北に数多い豊作祈願芸能の相互関連性や伝播・系譜等を考察する上できわめて貴重なものが含まれている。本稿では、「胆沢郡徳岡田植踊」の中から「弥十郎」、「藤九郎」、「えぶり（えぶりすり）」、「銭太鼓」、「奴田植踊」「仮面（道化）」の6項目を抽出して他との比較検討を試みた。その結果、特に「弥十郎」、「藤九郎」、「えぶり（えぶりすり）」は江戸期以降の秋田県を除く東北地方の豊作祈願芸能を貫く共通要素であることを明らかにした。また、とりわけ「弥十郎」の存在の重要性に着目して分析・考察を進めてみた。その方法として、江戸期の大衆作家十返舎一九『方言修行金草鞋』を主たる史料として分析した。以上の成果として、本稿ではとりあえず豊作祈願芸能における「弥十郎」分布圏と「藤九郎」分布圏を提示することができた。これらの分布圏の相違の背景には、農耕上の生業的相違が働いていることも若干ではあるが触れてみた。最後に、2つの分布圏を繋ぐ要素として「えぶり（えぶりすり）」の存在が今後見逃せない検討課題となってくるであろうことを論じた。

はじめに

菅江真澄は三河国出身でのちに羽後国秋田に住み着いた江戸時代後期の旅行家・民俗研究家である。真澄は江戸期の東北各地の豊作祈願の芸能について詳細な説明文や写生図を残している。その中には伊達藩の「胆沢郡徳岡田植踊」（現岩手県奥州市胆沢区）をはじめ、八戸藩の「八戸田植踊」・「八戸田植唄」（現青森県八戸市）、南部藩の「田名部県田殖躍唄」・「田名部田植え唄」（現青森県むつ市田名部）などが記録されている。

本稿ではこの中で特に「胆沢郡徳岡田植踊」の内容をもとに、現在の東北4県の田植踊りや八戸市周辺及び岩手県北部のえんぶりとの関連や相違点の比較分析を試みた。そのことを通して、「弥十郎」「藤九郎」「えぶり（えぶりすり）」の役柄などを含め江

戸期以来の東北の豊作祈願芸能の全体構成を明らかにしようとしたものである。

1、「胆沢郡徳岡田植踊」の概要

真澄は天明6年（1786）の正月を当時伊達藩（仙台藩）領であった胆沢郡徳岡（現岩手県奥州市胆沢区小山）で迎えている。当地における日記「十八日」には「田植踊」の記述がみられ、真澄は明らかにこの地の「田植踊」を目の当りにしていると思われる。その記述内容を以下に引用してみる（注1）。

十八日 あした日照りて、やがて雪のいたくふれり。田植躍といふもの来る。笛吹きつづみうち鳴らし、また錢太鼓とて、檜曲に糸を十文字に引渡し、その糸に錢を貫て是をふり、紅布鉢纏したるは奴田植といひ、菅笠着て女のさませしは早丁女田植といへり、やん十郎といふ男竿鳴子を杖につき出テ開口せり。それが詞に、「杓ずりの藤九郎がまいりた、大旦那のお田うえだと御意なさる事だ、前田千莉り、後田千莉り、合せて二千刈あるほどの田也。

馬にとりてやどれやどれ、大黒、小黒、大夫黒、柑子栗毛に鴨槽毛、躍入で曳込で、煉れ煉れねっぱりと平耕代、五月処女にとりては誰れ誰れ、太郎が嫁に次郎が妻、橋の下のずいなし（いしふし、またかじかのことなり）が妻、七月妊身で、腹産は悪阻とも、植てくれまいではあるまいか、さおとめども」といひをへて、踊るは、みな、田をかいならし田ううるさまの手つき也。「うえれば腰がやめさふら、御暇まをすぞ田ノ神」と返し返しうたひ踊る。そが中に、瓠を割て目鼻をえりて白粉塗て仮面として、是をかがふりたる男も出まじり戯れて躍り、此事はつれば酒飲せ、ものくはせて、錢米扇など折敷にのせて、けふの祝言とて田植踊等にくれけり

この文から、おおよそ次のような情景が浮かび上がってくる。以下はかなり大雑把に意識してみたものである。

田植踊り集団が笛や鼓太鼓を打ち鳴らしながら家々にやってくる。一行は錢太鼓というものを手に持っているが、これは檜の曲げ輪に糸を十文字に貫いて、その糸に錢を通してこれを振って音を出しながら踊るものである。紅布を鉢巻きにして踊るのを奴田植といい、菅笠を被って女性姿で踊るものを早乙女田植といっている。

やん十郎という男性が鳴子を杖にして登場し口上を述べる。それは次のような台詞である。「杓ずりの藤九郎が参った、大旦那のお田植えだとみな承知してのことである。それは前田千莉り、後田千莉り、合せて二千刈あるほどの田である。馬は、大黒、小黒、大夫黒、柑子栗毛に鴨槽毛など立派なものを連れて来て田に引き込み、しっかりと代掻きをさせた。五月処女（早乙女）は誰れ誰れか。太郎が嫁、次郎が妻、橋の下のずいなし（かじか）の妻など、七月に妊娠して腹産は悪阻であっても、苗を植てくれないということはあるまいだろう。さおとめたちよ」と言って終わる。

その後田植えの踊りが始まるが、皆が田を掻いたらしく、田に苗を植える手つきをする。「植えれば腰が痛んできそうさ、お暇いたしますぞ、田の神様よ」と返し返し歌って踊る。その中に、瓠を割って目鼻をえぐり白粉を塗って仮面とし、これを被

る男も出て戯れて踊る。このことが一段落して終われば田植踊り一行に酒を飲ませて食事も与え、そして銭や米を扇や折敷に載せて、今日の祝言とて田植踊の一行に差し上げるのであった。

さて、真澄が見た徳岡の田植踊り集団は、「奴田植」と「早乙女田植」があったようである。最初の「やん十郎」が大仰なほどの口上を述べ、それが終われば全員による田植えの所作を演じた賑やかな踊りが繰り広げられる。最後は現在の多くの田植踊り集団も「お暇申すぞ田の神」とか「来年もまた来るぞ田の神」のような文言で締めくくる。このパターンや踊りの展開は現在も基本的には変わっていない。なかには仮面を被っていわば道化として戯れて踊る男もいたようだ。たいそう賑やかな農村の小正月が田植踊りによってもたらされる様子がよく伝わってくる。踊りが終われば、田植踊り集団はお祝いにと家々で酒食や米銭のもてなしを受けたこともわかる。これも一部の地域では今も継承されているものと考えられる。

2、豊作祈願芸能との比較検討

前述の「徳岡田植踊」の内容を以下に述べる(1)弥十郎(2)藤九郎(3)えぶり(4)銭太鼓(5)奴田植踊(6)仮面（道化）の6点にしほり、江戸期の真澄の記録、現在の東北の田植踊りや八戸市周辺及び岩手県北部のえんぶりなどとの比較検討を行ってみたい。

(1)弥十郎について

文中「やん十郎といふ男」の名は真澄の他の記録にもみられる。「おくのてぶり」には、寛政6年（1794）正月15日、田名部（現青森県むつ市田名部）で「田植え唄」をうたう女性たちの様子を本文と写生図・説明文の2つに分けて記している。その説明文の最後の部分に「えぶりすりをここに藤九郎といひ、仙臺にてはやん十郎といふ」とある（注2）。ここでは「やん十郎」という存在に着目し、どういう役割を持つ存在なのか、その他の地域ではどうであるかを含めて検討してみたい。

①宮城県の「弥十郎」

宮城県仙台市周辺の田植踊りの現在に目を向けてみる。確かに今なお各田植踊りでは、「弥十郎（やんじゅうろう）」と呼ばれる頭巾を被る男子が登場するものが多い。ほぼ2名からなるが、団体によっては5名のところもある。「弥十郎」は田主（たあるじ）の役柄といい（注3）、早乙女の踊りを奨励する。場面転換の節目に登場し、きまってめでたい口上を述べながら踊り全体を進行させていくのが特徴である。

以下は宮城県内で「弥十郎」が登場する田植踊り団体である。

秋保町の「馬場の田植踊」・「長袋の田植踊」・「湯元の田植踊」、気仙沼市の「新城の田植踊」、加美町の「小野田の田植踊」（弥次郎1名）、富谷町の「富谷の田植踊」、宮城町の「愛子の田植踊」・「新川の田植踊」・「芋沢の田植踊」（弥十郎3名）・「大倉の役人田植踊」（弥十郎5名）・「下倉の田植踊」（弥十郎4名）、丸森町の「青葉田植踊」、登米市の「小島の田植踊」、気仙沼市の「大石倉田植踊」

このように宮城県では広範囲で「弥十郎」の存在が確認できる。なお、最後にあげた気仙沼市「大石倉田植踊」の「弥十郎」は江戸期に岩手県気仙郡から伝播したとされており（注4）、成人2人が扮する「弥十郎」の姿は岩手県内に伝承されるものとよく似ている。

②岩手県の「弥十郎」

現在の岩手県の「弥十郎」は烏兜（または烏帽子）を被りえぶり棒を持つ成人男子が多く登場する。おおよそ2人が登場して口上を述べながら踊り全体をリードする重要な役目を負っている。とりわけ北上市周辺では、「弥十郎」と「旦那」の2人が「エンブリ」（中立・なかだち）という名称で登場する。また、岩手県内の田植踊団体に「えぶりすり上手の弥十郎」という意味の歌詞が多くみられる。特徴的な事例として、北上市の「横川目田植踊」では、えぶり棒を持つ「弥十郎」と「旦那」の2人の掛け合い問答が延々と続く（注5）。

本田安次は『田楽・風流』の中で、昭和8年3月岩手県紫波郡見前村（現岩手県盛岡市西見前）の田植踊（現「見前町田植踊」）、さらに昭和23年12月に岩手県岩手郡西山村長山（現岩手県岩手郡雫石町長山）などの田植踊を見聞きして詳細な記録を残している（注6）。それによると、見前村の田植踊では9番目の演目「仕付口上」、西山村の田植踊では5番目の演目「中踊」に「植付口上」が紹介され、「旦那」と「弥十郎」そして「杓」（または「杓摺」）が問答しながら田の「えんぶりすり」などの農作業が進められていく様子が記されている。

現在も伝承される奥州市胆沢区の「都鳥田植踊」では、「弥十郎」は「杓摺」（太夫）の家来であり「農家の下男頭を型どるといふ」とされる（注7）。両者の関係・立場が対等でない点が留意される。

以下は現在「弥十郎」が登場する北上市、奥州市、遠野市の田植踊り団体である。

<北上市>

切留田植踊・山口東向田植踊・煤孫中通り田植踊・岩崎上契約会田植踊・岩崎下契約会田植踊・岩崎宿田植踊・横川目表田植踊・押切田植踊・堰の上田植踊・長沼田植踊・中野田植踊・荒屋田植踊・鳩岡崎座敷田植踊（烏帽子は被らない）・江釣子宿田植踊・妻川田植踊・口内田植踊（現在エンブリは中断）など。

<奥州市>

水沢区の「上巾庭田植踊」、胆沢区の「都鳥田植踊」など。

<遠野市>

「上柳田植踊」と「山口田植踊」では、「弥十郎」は「鋤頭・農夫頭」として登場する。

以上、岩手県の「弥十郎」には「掛け合い問答」や「えぶりすり」の農具や実際の所作を伴っている団体が多い点が目につく。

③福島県の「弥十郎」

福島県では田植踊りの中に「弥十郎」の名は現在ではほとんど見当たらない。二本松市の「石井の七福神と田植踊」、安達郡大玉村の「本揃の田植踊」、安達郡白沢村の

「稲沢の田植踊」などでは鍬頭を「久六」と名付けており、久六棒を持って口上を述べながら自ら踊る役割も演じている。双葉郡浪江町の「津島の田植踊」の鍬頭は道化とも言われるが「久六」とは呼んでいない（注8）。

ところが、江戸期の『陸奥国白川領風俗問状答』（現福島県白河市周辺）の五月の項に、次のような「田うえうた」の中に「弥十郎」の名を見出すことができる（注9）。

田うえうた

なひの中のうくひすは、なにをなにをとさへずる、くらますにとかそへて、たわらつめ、弥ン十郎とさへづる

とうたひ申候、尤うた数は多く有之趣に御座候へ共、いづれも歌の仕舞は弥ン十郎と留申候。夫ゆへ弥ン十郎ぶしこと申候よし。（以下略）

この白川領内の「田うえうた」の歌詞の一部とまったく同じものが、「須賀川市仁井田の田植唄」にあった。それは昭和40年当時の調査のなかで見出されたもので、次のようなものである（注10）。

今朝のさむさに浅川こえて 娘なにとり来
うらにちん取り巴の紋で 手籍よりに来
白の萱笠涼しい声で うだえながらに来
植える手先にきらきらひかる 旦那暮の鐘がゴーン
今日の田植の田んのし様は 大金持ちと来 きこえたよ
奥は奥州南部や津軽 外が浜まで来
苗の中のうぐひすどりは なにをなにをとさえずる
くらますにとかきかけて たわらつめ 弥ン十郎とさえずる

以上であるが、確かに最後の2行は前述『陸奥国白川領風俗問状答』とほぼ同じである。この『問状答』に「いづれも歌の仕舞は弥ン十郎と留申候、夫ゆへ弥ン十郎ぶしこと申候よし」とある。つまり、唄の最後は必ず「弥ン十郎」で終わるのでこの種の「田植唄」を「弥ン十郎節」というとのことである。田植唄に「弥十郎」が深く関与している事例を現福島県須賀川地域に確認することができるのであるが、現在では須賀川市仁井田地区には田植唄や田植踊りは伝承されていない。

各地の「田植唄」と「田植踊り唄」・「口上」とを比較すると、双方の内容に相違があつて、どちらが先行しているのかを含めて、これらの問題をどう考えたらよいか十分な検討を要する。したがって、須賀川市仁井田「田植唄」及び「田植踊」は必ずしも一体的には捉えられないのであるが、「田植唄」に「弥十郎」の名が確認できることの意味は少なくないだろう。つまり、福島県にも「弥十郎」が登場する田植踊り系がかつて中通り地方にあり、限定的ながら「弥十郎」分布圏として加えることができるということである。

④山形県（西村山地方）の「弥十郎」

山形県における「弥十郎（やじゅうろう）」は、寒河江市の「金谷田植踊」「日和田弥十郎花笠田植踊」「西覚寺田植踊」「谷沢田植踊」、河北町の「両所田植踊」、西川町

の「間沢田植踊」にだけみられ、なぜかこの西村山地方に限定されている。およそ2人が茶色の大型の仮面を被りながら口上を述べたり、扇子を巧みに操って早乙女数人の前方に出て踊るのが特徴である（弥十郎は「金谷田植踊」3人、「谷沢田植踊」1人）。この面が持つなんと不思議な表情から「弥十郎」が道化役とみられるむきもある。

なお、「弥十郎」が仮面で登場するのは、宮城県仙台市青葉区の「芋沢の田植踊」であるが、この場合は古い黒色の二対の面である。道化面といわれるもののけっして滑稽な顔つきとはみえない。この「芋沢の田植踊」と山形県西村山地方の「弥十郎」は仮面を被るという点が共通項として伝播や系譜を考えるうえで留意されるべきであろう。

⑤青森県八戸市「田植万歳」の「弥十郎」

例外的事例として、「弥十郎」の名は八戸えんぶりに付随する祝福芸の一つ「田植万歳」の中でもみられる（注11）。「田植万歳」とは扇子を持った太夫と鼓太鼓を持った才三との掛け合い問答で進められるが、太夫が才三に問いかける言葉の最後にはきまって「なるまいがなあ（くれまいがなあ）弥十郎」と繰り返して言い、相手の才三を「弥十郎」に見立てて問答を繰り返している。この飛び地的現象をどう捉えるか、今後も東北の田植踊り4県と八戸えんぶりを繋ぐ要素として慎重に検討する必要があるだろう。

(2)藤九郎について

前述した「やん十郎といふ男」が口上を述べる場面の出だしは、「杓ずりの藤九郎がまいりた」という文言から始まっている。この「藤九郎」という人名は、東北の5か所の豊作祈願芸能に共通して登場する（注12）。その中で、天明6年（1786）の「胆沢郡徳岡田植踊」では「やん十郎」、文化6年（1809）「八戸田植踊」は「ヤン重郎」と名乗る人物が口上を述べるなかに「藤九郎が参った」と記されている。同じく文化6年「田名部田植躍唄」においては「弥武十郎或は藤九郎といふが、男姿して鳴子竿を杖と突立てうたふ」とある。このように「藤九郎」は「やん十郎・弥十郎・弥武十郎」とほぼ同じ人物として描かれ、それはまた「えんぶりすり」「えぶりすり」といわれる田植え前の重要な農作業を行う人物でもあるのが特徴である（団体によっては、「やん十郎（弥十郎）」と「えんぶりすり（えぶりすり）」は別人物の場合もある）。

しかし、「胆沢郡徳岡田植踊」と「八戸田植踊」はすでに消滅しており、現状では「藤九郎」が田植踊りにみられる事例はまずない。田名部（現むつ市田名部）の「田名部田植躍唄」は現在では伝承が途絶えており、やはり「藤九郎」は姿を消している。寛政6年（1794）の「田名部田植え唄」には「えぶりすりをここにて藤九郎といひ、仙臺にてはやん十郎といふ」とあった。この「田植え唄」も消滅して今では「藤九郎」を確認することができない。

現在下北半島の東通村・むつ市・佐井村など42集落で、小正月に「田植え唄」「餅つき踊り」（一緒の集落では「田植え餅つき踊り」）が伝承されている（注13）。それらの口上や歌詞をみても「藤九郎」の名を見出すことはできない。

このように、踊り・唄も含めた田植踊り系の中では「藤九郎」はほぼ消滅している。

ところが、現在の八戸市の各えんぶりの歌詞の中に「えんぶりすりの藤九郎が参った」の文言がほとんど入っていることは注目される（注14）。また、「ながえんぶり」

系の太夫の名称そのものが「藤九郎」なのである。毎年「藤九郎」は生きた人物として登場し、「えんぶり」の中心的役割をはたしている。

岩手県北部地域でも「えんぶり」8団体が活動している。その中の一例として、九戸郡軽米町の「小軽米えんぶり」ではえんぶりを摺る太夫三人の先頭は「藤九郎」である。歌詞にも「藤九郎は舞込んだ、前田七千刈、後田七千刈、合わせて一万四千刈の豊田（ほうだ）より植えて申したりやい」というものである。このように、八戸市周辺及び岩手北部の「えんぶり」集団において、「藤九郎」は田植踊り系の「弥十郎」に対するもう一方の主要な存在として注目される。東北の豊作祈願芸能における「弥十郎」分布圏の一方で、「藤九郎」分布圏が想定されるゆえんである。

(3)えぶり（杓、えんぶり）・えぶりすり（杓摺り、えんぶりすり）

前記「弥十郎」分布圏と「藤九郎」分布圏の間で見え隠れして双方を繋いだり、底流を貫いているものが「えぶり（えんぶり）」もしくは「えぶりすり（えんぶりすり）」の存在である。ここでは、八戸市周辺のえんぶり以外の田植踊り4県の「えぶり」「えんぶり」事例をとりあげるが、さらに参考にあたいするものとして三重県志摩市の「御田植祭」の中の「杓差し」の役柄を紹介しよう。

①山形県

山形県全体では「えぶり」「えんぶり」の存在や呼称はきわめて少ないが、寒河江市の「中郷田植踊」「谷沢田植踊」、朝日村の「大綱田植踊」では成人男子が「えんぶり」と称する棒を手にもって踊るので「えんぶり衆」ともいわれる。それ以外の団体はテデ棒とか源内棒などを持って踊るので「えんぶり衆」とはいわない。

②福島県

大沼郡昭和村の「両原の早乙女踊」（田植踊）や会津美里町の「佐布川の早乙女踊」（田植踊）でも二人が農具の「えんぶり」を持って登場し、早乙女の前に出て農作業の所作をしながら踊る。このタイプは会津地方の田植踊りである各「早乙女踊」団体に少なからずみられるものである。なお、「佐布川の早乙女踊」は後に述べる「伊佐須美神社御田植祭」のときに演じられており、盛大な祭り行事に花を添えている。

③岩手県

岩手県では、先にみたとおり「弥十郎」とともに「えぶりすり」役が登場する場面がきわめて多いのが特徴である。その一例として、奥州市胆沢区の「都鳥田植踊」に「弥十郎」とともに烏兜（烏帽子）を被った「杓摺」が登場するが、これは田植踊りのリーダーで「太夫」ともいっている。こういう点において、「杓摺」は八戸周辺の「えんぶり」リーダーである「太夫」（どうさい系えんぶりでは「藤九郎」）の存在とも重なってくるのである。

④宮城県

宮城県では「えんぶり」の存在は岩手県とは逆にあまりみられない。しかし、青葉区大倉地区の「大倉の役人田植踊」に3人（かつては5人）の「弥十郎」が登場するが、その長（リーダー）が「鬼人」と書いて「えんぶり」と呼ばれる人物である。頭には引立烏帽子を被って背には「神武天皇」と書かれた陣羽織を着る。手には鳴子のついた「えぶり」を持って登場し、えぶりすりの所作から踊りは始まる。

また、かつて泉地域（現仙台市泉区）の6集落に「奴田植」といわれる仙台市域とは異なる芸態の田植踊りがあったが、これには「えんぶり振り」の太夫2人が登場し

たという。「大倉の役人田植踊」は後に記す「奴田植」との繋がりが強いとされている（注15）。

⑤三重県志摩市

「えぶり」の存在は、三重県志摩郡磯部町（現志摩市）の「伊雑宮御田植祭」にもみられる。当祭りは毎年6月24日に開かれ、「磯部の御神田」として日本三大御田植祭の一つとして名が知られている。平成2年に重要無形民俗文化財に指定された。この祭りで「えぶり」は「杵差し」と呼ばれており、2人が大型の杵の農具を持って行列の先頭に立つ。一文字笠を被って派手な模様の浴衣地で仕立てた短衣を着用する。紺色の股引に脚絆を着けて白足袋をはいている。

「杵差し」の役目は、当日午前9時頃に「七度半」といわれる使いに出ることから始まる。苗代の早苗数本を抜き取り、これを持って伊雑宮の一つの鳥居の北の根方に置いてくる。これを七度繰り返すのである。実際に田植えを行う「御料田」では、苗代に行ってその東側に杵を畔に突き立てたり、または二つの杵を鳥居型に立てて田植えの神事を見守る。激しい「竹取り神事」が終わってから、荒れた田をならすために実際に杵で田面を平らに整地する場面もみられる。お田植え神事が終わって午後の「踊り込み」のときは、「杵差し」は諸役行列の先頭に立って高らかに歌って杵を振り上げて柄尻で大地を打ち終始リード役を務める（注16）。

以上が「磯部の御神田」における「杵差し」役の概要である。「えぶり」「えぶりすり」は地域を越えて、西日本の田植えの祭り行事に明確に存在し、重要な役目をはたしているのである。

なお、「えぶり」「えぶりすり」については、後段の「3. 分析と考察」でも多面的に検討を加えている。

(4) 銭太鼓について

真澄の文には「銭太鼓とて、檜曲に糸を十文字に引渡し、その糸に銭を貫て是をふり」とあって、「銭太鼓」という用具が記されている。じつは現在の宮城県のかの田植踊の中に真澄が描いたものとはほぼ同じ「銭太鼓」が採り物として使われている。それは直径およそ18センチの竹の輪に紅白の綾文が巻かれている。輪の中には針金や糸が十文字に交差しており、針金（または糸）には3枚の「銭」（貨幣）が貫かれている。これを振ると音が出るいわば楽器の一種であるが、踊り手は両手にとって振りながら踊るのである。この踊りは、一方では「銭太鼓」の演目名で以下に示すとおり今なお多く存在する。

宮城県内で「銭太鼓」の演目を持つ団体は、秋保町の「湯元の田植踊」・「馬場の田植踊」・「長袋の田植踊」、宮城町の「愛子の田植踊」・「新川の田植踊（「銭太鼓くづし」もあり）」・「芋沢の田植踊」、丸森町の「青葉の田植踊（「銭太鼓田植」と称する）」、登米市の「小島の田植踊」などである。特に秋保町の3団体の「銭太鼓」には現在でも江戸時代の一文銭が使われている。岩手県金ヶ崎町の「三ヶ尻座敷田植踊」の演目にも「銭太鼓」がある。手にもって踊る「銭太鼓」は現在は鈴に変わっている。

他方では、「銭太鼓」は現在の八戸市およびその周辺に継承される「えんぶり」の一演目「えんこえんこ」にも用いられている。こちらも約20センチの輪で赤と黄色の綾文様に布を巻いており、さらに輪の4か所に紅白の房を付けている。縦横十文字に

針金を通して穴の開いた貨幣や鈴をそれに通している。それを踊り手たちが両手に持ってクルクル回しながら踊る。岩手県九戸郡軽米町の「小軽米えんぶり」では、えんぶりに付属した余興芸能として、女性の手踊りの演目「鎌倉」の中で「錢太鼓」を持って踊るものがある。

じつは、「錢太鼓」とは各地の芸能にみられるもので「錢太鼓踊り」などもある。錢（硬貨）の触れ合う音を利用して踊りの伴奏に使う楽器ともいえ、似たようなものは沖縄にもみられる。おおよそ曲輪型（タンバリン型）と竹筒型の2種があり、全国的にも有名な島根県安木節の「錢太鼓」は後者である。前者の曲輪型が「えんぶり」の「えんこえんこ」や宮城県の田植踊り団体などが使用しているものである。

これまでみてきたように、「錢太鼓」は真澄によって江戸期の天明6年（1786）、伊達藩北部胆沢郡の田植踊りに使用されていたことが確認できる。はたして「錢太鼓」とりわけ曲輪型の起源は東北地方の豊作祈願芸能にあるのか、または東北以外から取り込まれて八戸周辺まで伝播したものか。これまで、東北において文化は日本列島でもより発展した畿内や西方よりもたらされるもの、との先入観・固定観念にとらわれてきた。今後、従来の思考の枠組みにとらわれない姿勢で文化の起源問題を検討する必要がある。

(5) 奴田植について

真澄の文には「紅布鉢纏したるは奴田植といひ、菅笠着て女のさませしは早丁女田植といへり」とある。後者の「菅笠を被って女装をした早乙女の田植踊り」とは、現在も続く最も一般的な東北の田植踊りの姿をさすであろう。ここで注目したいのは前者の「奴田植」というものである。頭に紅布の鉢巻をした奴である男性の踊り手が浮かび上がるが、はたしてどのような芸態や特徴をもっていたのか。

その手がかりとして、宮城県の田植踊りには「奴田植」と「弥十郎田植」の2種があったことが『仙台市史』には記されているので、以下に引用してみる（注17）。

仙台市域の旧村落にはその土地の田植踊にかかわる書付が多く残っている。さらに古老の口碑によっても仙台北下周辺の農山村の集落の大半には田植踊組があったようであり、現在活動しているもの9組と中断・廃絶したものを合わせると29組にのぼり、うち弥十郎田植23組、奴田植6組であることが一応確認される。

ここに記された「奴田植」とはどのようなものであったのか。それはかつて旧泉市（現仙台市泉区）に伝わっていたもので、奴振りの手太鼓打ちや「えんぶり」役がついた田植踊りだったという（注18）。引き続き『仙台市史』の関連部分を引用してみる。

泉地域にしか伝承されなかった奴田植は6集落ほどにあったらしいが、いまは全く廃絶して、一部の文献にみられるほかは道具衣裳なども残っていない。奴田植は、青葉区大倉の役人田植踊との関連を考えるのに欠かせない。泉区実沢あたりと大倉とは地理的にも近く、山越えしての交流が深かったことから同系に近い芸能が行われた可能性は濃い。

奴田植にはえんぶり振りの太夫という役が2人、控1人もいたが、これは大倉で

えんぶりと呼んでいる役と似ている点が多い。馬役という男の子2人が出るというが、大倉にはない。奴役は12人である。奴姿に向鉢巻木刀を差し、股から下は素つねで左手に大団扇、右に長い綾竹をもつ。これが奴田植と称する所以の役柄と思われるが大倉には欠けている。そして役人か躍人かは不詳だが、役人田植と呼ばれた所以の役の男8人がいる。投げ頭巾をかぶり、袖無羽織を着、手太鼓を打ち振るもので、大倉では弥十郎と呼んでいる2人が「役人」であろう。奴田植には、このほか当然花笠に振袖姿の早乙女がおり、女3人で踊ったといい、囃子方も大勢だったらしい。(中略) 奴田植は昭和の初年まで踊られていたと聞く。(以下略)

引用は以上であるが、焦点である「胆沢郡徳岡田植踊」の中の「奴田植」と泉地域のそれとはどれほどの繋がりがあったのか、ここからは知ることができない。

ところで、現在伝承されている岩手県奥州市胆沢区の「都鳥田植踊」にも「奴」といわれる数名が登場する。「奴田植」とは呼ばれていないが、真澄が記録した「胆沢郡徳岡田植踊」は現奥州市胆沢区小山であり、「都鳥田植踊」とは隣り合わせの集落なのである。この「奴」は真澄の時代の「奴田植」と何らかの関連がありそうなものであるが、はたしてどうであろうか。

「都鳥田植踊」の「奴」とは20歳前後の青年の役で、5～6人が向こう鉢巻（前結びの鉢巻）をして背に「入梅」の紋をつけた法被を着る。右手に約30センチの竹に鳥の羽根を結びつけたものを持って踊る。それは苗を表すものといわれる。

この「奴」以外に、「杵摺り」（太夫・田植踊りのリーダー）1人、「弥十郎」（杵摺りの家来、7、8歳の子ども）1人、「羯鼓」（12、3歳の少年）5～6人の役割がある。小正月に家々を回る門づけでは、笛、太鼓、杵摺り、弥十郎、羯鼓、奴の順に入って庭先か土間で演じたという（注19）。

以上をまとめると、泉地域の「奴田植」には「えんぶりの太夫」がついていた。現在の「大倉の役人田植踊」にも「えんぶり」役がいる。また「都鳥田植踊」にも「杵摺り」がいて「弥十郎」を従えて踊り全体をリードするのである。このような点から、「奴田植」は八戸市周辺の「えんぶり」などへと繋がる側面が見出されるが、確かなことは不明であり多くの検討すべき余地を残している。

(6) 仮面（道化）について

文中に「瓠を割て目鼻をえりて白粉塗て仮面として、是をかがふりたる男も出まじり戯れて躍り」とある。これは仮面を被ったいわば「道化」ともいえるものだろう。この文面からは即興で踊ったむきも感じられる。「道化」は、現在でも田植踊に少なからず登場する。例えば、岩手県金ヶ崎町の「三ヶ尻座敷田植踊」では野良着姿の男1人と妊婦姿の女1人、盛岡市の「見前町田植踊」と紫波町の「山屋田植踊」に「一八」（いっぱち）、遠野市上郷町の「暮坪田植踊」には「種ふくべ」という存在がみられる。

福島県では、南会津町の「鴉巢早乙女踊」（田植踊）に「太郎次」と「次郎次」という2人の「道化」が登場する。この会津地方各地の「早乙女踊」（田植踊）にはひょっとこや「道化」が比較的多くみられる。先にあげた「佐布川の早乙女踊」（田植踊）にもかつて「道化」がついていた。

これらの「道化」役は鍬や杵をかついで登場して田をならす所作も演じたり、とき

には口上も述べる場合もある。最も本領を発揮するのは、ユーモラスな表情で腰や尻を振りながらやや品位を欠く行状で観客を笑いの渦に巻き込むところにあるだろう。「道化」は田植踊りに限らずシシ踊り、獅子舞、山伏神楽、念仏踊りなどにもみられる。古今東西、風流芸能をはじめ多くの芸能において、たんに余興芸としてのみならず、演じ手側と観客側の壁を打ち破る「繋ぎ役」として貴重な役割をはたしているといえよう。

3、分析と考察

(1)「弥十郎」の存在

東北の豊作祈願芸能を解明するカギとなるものに「弥十郎」と「藤九郎」という役柄があることはすでに述べた。ここでは、とりわけ広範囲に登場する「弥十郎」について、以下に紹介する江戸期の文献を参考としながら分析と考察を加え、今後の解明の手がかりとしたい。

江戸時代の大衆作家十返舎一九は20数年をかけて『方言修行金草鞋』二十四編を著した。そのなかで、文化11年（1814）に著した第2巻の7編「本宮」宿（現福島県本宮市）の場面が注目される。そこには「屋ん十郎」と称する人物が描かれている（注20）。

その人物は頭巾を被りどてらを着て前掛けをした成人男子である。目鼻立ちが整ってきりりとした表情をしており、体格の良い青年と見受けられる。前掛けには葉を付けた蕪1個が大きく描かれているのが目につく。左手は何か握っているかに見えるが、あるいはどてらの袖口を掴んでいるふうでもある。

後方には一文字型に近い道中笠を被って目だけを残して白布で顔を覆った人物が描かれている。髪型や細身の体型から明らかに女性と思われる。着流しに帯姿であるが、歩きやすいようにであろうか、着物の前方の裾を左手でたくし上げて次の場に急いでいるふうである。このしぐさは、早乙女役として田んぼに足を入れて汚れる裾をたくし上げる姿と重なって写るのは考えすぎか。

さらにそのあとに三味線を抱え烏帽子らしきものを被った中年男性がいる。これら後方の男女2人は「屋ん十郎」のお伴をしている様子にみえる。三味線が付いているところをみると一行は旅芸人風でもある。この3人のほか路上には8人が描かれており、建物や人々の図の合間にはびっしりと説明文が記されているが、この3人の存在を推測する内容は一切読み取ることができない。

さて、ここで『方言修行金草鞋』の中の「屋ん十郎」一行について、東北の田植踊りで近似すると思われる事例をいくつかあげてみよう。

先に宮城県太白区秋保町の3地域の田植踊りをあげたが、いずれも「弥十郎」の前掛け衣裳には「蕪紋」が描かれているのである。このことに関連して『仙台市史』は次のように記している。

嘉永2年（1849）刊の二世十返舎一九『奥州一覽道中膝栗毛』の「仙臺年中行事大意」によれば、当時仙台北下には大田植と称する田植踊のほか、大黒田植、副太郎、独田植、案山子、米搗田植などの門付芸があった。大田植といってもせいぜい

早乙女2人、弥十郎1人、岡の衆が2、3人というごく少数の田植踊であった。大田植には三組ばかりの系統らしいものがある、一つは燕組といって衣裳に燕の紋をつけていたといい、現在の太白区秋保や青葉区旧宮城町地域の田植踊の大半には弥十郎の背紋や前幌というまわしに千両燕の大紋が付いている。他の二組には蟹と海老の紋が付きかに組、えび組とっていたというが、これらは現在は残っていない。なお、『奥州一覽道中栗毛』には歌川国芳の挿絵によって田植踊衆五人が活写されている。

以上の引用には仙台北下の田植踊りと「燕紋」の由来が記されている。現在の秋保町の田植踊りには「弥十郎」が着るブツツァキと呼ぶ衣裳や大平袖に「燕紋」がみられる。この「燕紋」が『方言修行金草鞋』の「屋ん十郎」の燕と一致するとみるべきか。そうすると「屋ん十郎」ははじめ少なくとも描かれた3人は田植踊りの一行と読みとってもいいであろうか。当時の仙台の田植踊り一行は岩手などと異なるとごく少人数の組だったことも上記から知られる。大いに興味がそそられる事例である。

また、「屋ん十郎」の後方の女性が目を残して顔を覆っていたが、じつは仙台の田植踊りで早乙女が目出しして鼻・口を三角の白紙で覆うのは「大沢の田植踊」と「芋沢の田植踊」がある。ただし、この2団体の早乙女は成人男子が演じており、現在では他の宮城県の田植踊りの中では異例となっている。宮城県内の田植踊りの早乙女役は華やかに着飾った若い女性がきわめて多い。これはのちに女性に変わったのであって、本来は男性であり大沢と芋沢の田植踊りこそ古態であるとの見解がなされている(注21)。

さて、田植踊りの中の早乙女役は、本来女性であったのか男性であったのか。民俗芸能総体からすれば、女性への穢れ観念に起因して男性が芸能の主たる役割を担ってきたことは事実である。しかし、田植え作業は古くから田の神との関わりで早乙女がはたすのが本来であったという歴史に照らし合わせれば、田植踊りの芸能において早乙女役のみは女性であったことはなかったのか。今後はこのあたりの文献及び絵画資料上の慎重な検討が必要である。

『方言修行金草鞋』では「弥十郎」の後方に三味線を持つ1人の男性が描かれていたが、山形県西村山地方の寒河江市日和田弥十郎花笠田植踊には現在でも三味線がついている。ここでは先に述べたように大きな仮面を被った2人が「弥十郎」に扮して扇子さばきも巧みに踊る。田植踊りに三味線がつく事例はこれ以外ほとんどないが、とりあえず手がかりとして取りあげておきたい。

さて、類似事例の紹介はここまでにして、『方言修行金草鞋』の「本宮」の場面をさらに続けてみよう。「屋ん十郎」の手前に子ども2人がおり、「アレアレ、屋ん十郎がきたきた」と叫んでいる。すでに前を歩いていた武士風の男とそのお伴が同時に振り返って「屋ん十郎」を見ている。これに対して「屋ん十郎」は右手をあげて子どもたちに答えている風情である。この場面は、次のページの「杉田」(現二本松市杉田)にもまたがって描かれている。このように、「屋ん十郎」は十分に世間に知られた存在であったことが窺える。ただし、この時点で「屋ん十郎」の名が特定の人物名であったか、一般化した名であったかは定かでない。

『方言修行金草鞋』を通して、「屋ん十郎」とは実在した芸能者ではないかとの憶測も生まれる。もしかして、図は長唄三味線の家元である「杵屋弥十郎」(初代、江

戸中期)を描いたものではないかとの思いも巡る。しかし、現状では東北の田植踊り系の「弥十郎」そのものとの繋がりほとんどみえてこない。

江戸期「本宮」の宿場町界隈にみられる「屋ん十郎」が田植踊りの「弥十郎」の役柄に相当するものとしたら、なぜ現在の福島県の田植踊りでは「弥十郎」が消えているのか。「弥十郎」は旅芸人の一人であってその土地に定着していなかったからか。では、仙台を中心とした宮城県、及び岩手県盛岡以南、八戸市周辺の広い範囲で現在も「弥十郎」が存在するのはなぜなのか。

以上、「弥十郎」が特定の人物であったかどうかの詮索をしているのではない。「弥十郎」役の有無を通じて、東北の田植踊りの発生や分布、さらに系譜等を探りたいのである。『方言修行金草鞋』の「屋ん十郎」については、その究明のための足がかりとなるものと考えられるのである。

(2)「えぶり」と「えんぶりすり」

これまでの考察から、東北4県の田植踊りはおおよそ「弥十郎」分布圏であり、一方では八戸市周辺および岩手県北部のえんぶりなどは「藤九郎」分布圏とみることができた。この二つの分布圏を貫くものとして、「えぶり」(えんぶり)の農具、及びそれを持って農作業の所作を含めた演技を行い、ときには口上を述べたりする「えぶりすり」(えんぶりすり)の存在を見出すことができる。実際、田面を平らにならすことは、田植えが支障なく遂行できそれが豊作に繋がる必須条件であったといえる。これを可能とする道具「杵」と、重労働である「杵摺り」が象徴化されて芸態・演目としての「えぶり」「えぶりすり」が生じたといえる。

『今昔物語集』巻28の中には「近江国矢馳郡郡司堂供養田楽語第七」という箇所がある。そこには、かつて比叡山の学僧であった教円が対岸の郡司が建立した仏堂の落慶供養に招かれた際、白装束を着た十余人の男衆の田楽の芸能を目の当たりにした場面の説明がある。田楽の演奏集団の中にまじって「杵ヲ差テ」いる人物もいる。その場面の前後の文を次に引用してみる(注22)。

日ノ高ク成ヌレバ、馬ヲ□テ□ギ行クニ、此ノ白装束ノ男共ノ馬ニ乗タル、或ハヒタ黒ナル田楽ヲ腹ニ結付テ□□ヨリ肱ヲ取出シテ、左右ノ手ニ桴ヲ持タリ。或ハ笛ヲ吹き、高拍子ヲ突き、□ヲ突き、杵ヲ差テ、様々ノ田楽ヲ二ツ物・三ツ物ニ儲テ打□リ、吹き乙ツ、狂フ事無限シ。供奉、此レヲ見テ、此レハ何カニ為ル事ニカ有ラムト思ヘドモ、□テ否不問ズ。

この文は、白装束の男たちが馬に乗ったり、あるいは黒色の太鼓「田楽」というものを腹につけて、左右の手に桴を持って打ち鳴らしている。まわりには笛を吹く者、「高拍子」(楽器か)を突く者もいた。そこに杵の農耕用具を振り回している者もいた、というようなことを説明している。

中世の田楽において特に「田植田楽」の系譜であれば、田に入って早乙女の苗植えを囃し立てる田植え儀礼の楽器演奏を行う。一方で「田楽躍」となると田に入らないで大寺社の祭礼などで行われた専属の芸能集団の楽器演奏や踊りが主である。この両者は根底で繋がって発祥を同じくするのかどうかは不確かであるが、前述の『今昔物語集』の場面はどうやら後者の田楽にあたるとみられる。ここで杵を振り回す役が登

場しているのが注目される。古くから芸能に「えぶり」が伴い、杵の用具そのものや「えぶりすり」役もあったことが再認識させられるのである。

広島県山県郡千代田町で毎年6月第一日曜日に行われる「壬生の花田植（大田植）」では、飾り牛の代掻きが終わったあとに実際に杵を持った人が田をならす作業があり、それとともに注目の早乙女たちによる苗の手植えのハイライト場面があることにも留意しておきたい。

三重県志摩市「御田植祭」にみられる「杵差し」などの役柄があることはすでに確認できた。そういう役柄と東北の豊作祈願芸能とを比較すれば、口上を述べて踊ったり一部道化役も演じたりというような、芸能化された役柄ではない点が異なっている。しかし、同じ「田植え」を基本にした祭り芸能において、「杵差し」や「えぶり」「えぶりすり」などが先導的役割を担っていることは確認できるのである。

関東や西日本に多い「御田植祭」「御田植神事」「花田植（大田植）」系の祭り行事は福島県会津地方が北限であり、現在では「伊佐須美神社御田植祭」（会津美里町）、「慶徳稲荷神社御田植祭」（喜多方市）、「栗村稲荷神社御田植祭」（会津坂下町）があげられる。ただし、これらの中には「杵」役はみられない。「伊佐須美神社御田植祭」では「佐布川の早乙女踊り」に「えんぶり」2人の踊りがついていることは先にあげたとおりである。今後、東北の豊作祈願芸能の包括的研究を進めるためには、「御田植祭」「御田植神事」「花田植」などとの全国的関連にも注意を払う必要があり、その場合「えぶり」「えんぶり」「えぶりすり」などは重要なキーワードになると考えられる。

ところで、青森県では「えぶりすり」を「えびりすり」ともいい、「重労働なのでこのエビリスリを担当したものは田植えが終われば来年まで寝て暮してもよいというたとえもあった。泥の高低を見きわめるのは難しいため経験豊富で指導的立場の男性がその役にあたった。」というのである（注23）。

また、『会津農書』上巻三十一の項には次のように記されている（注24）。

杵摺 山田里田共に杵の摺様は下畔を少し高く水をよく持つやうに摺べし。村ざりあれば稲不出来する。但下畔の餘り高は上畔の稲水にも喰て悪し、泥の練不合は不作のもとひ也。田の内を能見て馬の不通所有は指図をして代を搔くべし。搔田の才覚は杵摺の役目也、才覚也。

ここで、文末の「搔田の才覚は杵摺の役目也、才覚也」とあるように、「えぶりすり」はきわめて重要な役目でありそれは才覚であると断言されていることが注目される。

このような「えんぶりすり」という労働の現実を踏まえれば、次のような「えぶり」という道具の解釈もあながち否定できないだろう（注25）。

（えぶりは）田畑の泥をゆり動かしならして、田畑（耕地）の靈魂・靈力を、呼びさまし目覚めさせるためのものであった。（中略）杵によって前述通り、田畑を揺り動かして、田畑の中の作物を育てるより靈力や靈魂を、ふるいたたせるための呪具とした。

文末にある「呪具」という捉え方はかなり踏み込んだ解釈である。しかし、これまでみてきた東北地方の豊作祈願芸能を考えれば、「えぶり」はたんなる農具として用いられているだけでない。切に豊作を祈って踊る象徴的「採り物」として用いられていることがわかるのである。「えぶり」は田畑の霊力を呼び覚ます「呪具」と捉えられた一面をもち、その観念が豊作祈願の芸能の「えぶり」「えぶりすり」に繋がっていることは十分考えられる。

4、まとめ

「胆沢郡徳岡田植踊」の内容には、東北に数多い豊作祈願芸能の相互関連性や系譜等を考察する上できわめて貴重なものが含まれていた。本稿では、その中から(1)弥十郎(2)藤九郎(3)えぶり(4)銭太鼓(5)奴田植踊(6)仮面（道化）の項目を立てて比較検討を試みた。その結果、特に(1)(2)(3)は江戸期以降の秋田県を除く東北地方の豊作祈願芸能を貫く共通要素であることを明らかにすることができた。さらに本稿では、とりわけ重要と思われる(1)「弥十郎」、(3)えぶり、を分析・考察の対象として取り上げた。

そこで「弥十郎」については、東北の豊作祈願芸能の中で不可欠な役割を演じる存在であること、当地方の豊作祈願芸能の解明において歴史的芸能的研究では見落とせない役柄であること、などが強調できる。江戸期を含めたおよそその「弥十郎」分布圏を想定すれば、福島県（中通り地方）、山形県（西村山地方）、宮城県、岩手県盛岡以南、青森県八戸周辺にあるといえるだろう。

このような「弥十郎」分布圏に対して、現在の「藤九郎」分布圏は、およそ岩手県北部地域から八戸市周辺に分布するえんぶり系地域に見出すことができる。「弥十郎」「藤九郎」については、とりあえずこのような一定の類型化と分布圏の設定が可能であることを述べておきたい。

そこで2つの分布圏の背景には、農耕上の生業的相違が横たわっていることが考えられる。例えば、「弥十郎」分布圏では稲作が主として行われてきた農耕地域、「藤九郎」分布圏では、主として稗栽培が行われてきた山間地域や太平洋沿岸地域ということが想定されるのである。今後研究を進めるうえでは、民俗芸能に対する生業史的観点を加えた分析・考察が必要であろう。

また、本稿では「えぶり」「えぶりすり」が2つの分布圏を貫く共通項として浮上した。東北地方のかんりの豊作祈願芸能にこのどちらかの存在と役割がみられるのである。「えぶり」は田植え前に不可欠な作業用具であり、それを使った重要な農作業が「えぶりすり」である、という意味合い以上のものがそこに投入されていた。つまり、芸能においては「えぶり」は単なる農具ではなく、切に豊作を祈って踊る象徴的「採り物」として用いられてきたのである。したがって、「えぶり」は「呪具」とあるという捉え方、解釈はそれなりの妥当性をもっていると考えられる。人々によって「えぶり」は田畑の霊力を呼び覚ます「呪具」とされ、それが豊作祈願芸能の「えぶり」「えぶりすり」に繋がっていることは十分認められる。

おわりに

菅江真澄が記した豊作祈願の芸能で、本稿では詳細な検討を加えることができなかったものに、「田名部田植え唄」、「南陪糠部郡田名部県田殖躍唄」、「津刈の田唄」、「七戸田植唄」などがある。本来はこれらを含めた比較分析や全体考察が必要だったのであるが実現できなかった。

また、「田名部田植え唄」（寛政6年）と「南陪糠部郡田名部県田殖躍唄」（文化6年）について、下北地方の現東通村を中心に伝承されている「田植餅つき踊り」にどう繋がっているのかなども重要な問題であったが論を進めることができなかった。これらのことは今後とも課題意識をもちながら調査研究を進めていきたい。

最後となったが、「弥十郎」についての『方言修行金草鞋』や『須賀川市史』等の史料をご教示下さった前福島県立博物館学芸員の佐々木長生氏に感謝を申し上げる。

<注>

- 1、「かすむこまがた」『菅江真澄全集』第一巻所収 未来社 1971年
- 2、「おくのてふり」『菅江真澄全集』第二巻所収 未来社 1971年
- 3、『仙台市史 特別編6 民俗』仙台市史編さん委員会 1998年
- 4、『気仙沼市史』宮城県気仙沼市史編さん委員会 1994年
- 5、『北上の田植踊』岩手県北上市教育委員会 1992年
- 6、本田安次『田楽・風流一』木耳社 1967年
- 7、同上『田楽・風流一』
- 8、『福島県の民俗芸能』福島県教育委員会 1991年
- 9、『須賀川市史』文化と生活 福島県須賀川市 1978年
- 10 同上『須賀川市史』
- 11、『えんぶり』八戸市教育委員会 1981年
- 12、5か所の豊作祈願芸能とは、「胆沢郡徳岡田植踊」「八戸田植踊」「東津軽郡平内町童子えんぶりすり」「南陪糠部郡田名部県田殖躍唄」「田名部田植え唄」である。
- 13、『東通村史』民俗・民俗芸能編 青森県東通村史編集委員会 1997年
- 14、『えんぶり詞集』八戸えんぶり保存会連合会 1973年
- 15、前掲『仙台市史』
- 16、伊藤保『磯部の御神田』三重県志摩郡磯部町教育委員会 1976年
- 17、前掲『仙台市史』
- 18、『仙台の民俗芸能』仙台市教育委員会 1995年
- 19、『岩手県の民俗芸能』岩手県教育委員会 1997年
- 20、今井金吾監修『方言修行金草鞋』第2巻（5～8編）大空社 1999年
- 21、前掲『仙台の民俗芸能』
- 22、『今昔物語集五』新日本古典文学大系37 岩波書店 1996年
- 23、『日本民俗学大辞典』上 吉川弘文館 1999年
- 24、長谷川吉次編著『会津農書』佐瀬与次右衛門顕彰会 1968年

25、石上堅著『日本民俗語大辞典』桜風社 1983年